

かりがねや生死はいつも湯が滾り

藤田湘子

私が死と初めて遭遇したのは、祖父が亡くなった小学生の時。当時は家で葬儀が営まれ、男衆は力仕事、女衆は家内の台所仕事など、親戚縁者みんなが集って手分けしていた。土間に続く台所には確かに湯が滾っていた。

父と母の最期は病院であつた。看護師が、湯灌の替りとされる清拭を行うということで、その間身内は部屋を出された。父の亡骸は一端家に帰つたが、母は茶毘にふされた後、骨壺となつて帰つてきた。どちらも、参列者に出すお茶を沸かす程度の湯の滾りであつた。目の前にある家族の死は、どこか他人事のように運ばれ、過ぎていった。それでも、家族が揃つて死者を見送ることは出来た。コロナ禍の今はそれも叶わないことがある。